

# 関西農業史研究会報

-No4-1979.5.12-

第17回例会は、三橋時雄先生の『日本農業経営史の研究』が出版されたのを記念して、1979年4月21日、京大農経5階会議室で行なわれた。3時から、徳永光俊が近世を中心として書評を行ない、そのあと三橋先生もまじえて活発な討論がなされた。参加は11名であった。  
 5時から、北白川のあたりにある本店にて、出版祝賀会を行なった。先生の研究の足跡をふり振り返りながら、話がはずみ、盛会のうち12時8時に終わった。9名参加。  
 三橋先生の書について、既に幾つかの新聞・雑誌で紹介され、高い評価を受けている。はじめにその一部を載せる。

## 日本農業経営史の研究

三橋 時雄 著

「家族労働の小規模経営は日本農業に宿命なり」——これは本書第二章、第一節の副題である。そして第二章以下に、わが国の歴史を近世以前、近世前期、近世後期、近代(明治・大正・昭和戦前期・昭和戦後期)に分けて、それぞれその時期におけるわが国の農業経営の発展過程を、著者の水年の研究の成果と豊富な資料を駆使して、日本農業経営の通史としてまとめている。  
 著者はこの分析において、「日本農業経営の小規模性」ということも、決して永久不変の固定的なものではなく、今後、条件の変化によっては規模を拡大することもありうる」という考え方に立って、これを歴史家の立場からふりかえってみるという分析手法を用いている。  
 そして著者は本書の第一章(序

『全国農業新聞』94.4.13より

論)において、本書の「日本農業経営史の研究」の手法について、「本書は農業経営という研究対象の歴史的研究をめぐって、農業経済学的、農業経営学的、農業技術学的ならびに経営史学的研究が、相互にどのように関係し、補完し合うか」ということを明らかにしたもので、本書の持つ一つの大きな意味は、いわばこのような「学際的」な手法にあるといえることが「ききであらう」と述べている。かく、本書は農業経済の歴史と、これを規制する農業技術の歴史を統合して、新しい農業史としての「農業経営史学」の確立を提唱されているとともに、この視点をふまえて、第二章以下の分析を試みているところに特色がある。  
 また序論において著者は「結局農業経営史学とは……農業経営学の方法によって、歴史時代のそれぞれの断面における農業経営を研究し、それによって各時代の農業経営の特質を明らかにするとともに、各時代を通して見られる農業経営の発展を跡付け、現時における農業経営の理解に役立てることを目的とする学問である」といえる。そして、単に日本農業経営の歴史を明らかにするのみでなく、新しい学問体系を提唱する野心的な力作であるといえる。  
 著者は昭和五十年から京都大学名誉教授、水年京都大学農学部農林経済学教室において農史講座を担当された。現在大阪学院大学教授。  
 (発行所)ニールズ書房・京都市山科区日ノ岡製粉町一、定価五千五百円)

# 新しい農業経営史学を提唱した労作

三橋時雄著『日本農業経営史の研究』

九州大学名誉教授

山田龍雄

本書は、著者が一九五一年に「農業経営史学」についての一試論を発表して学界の注目を集めて以来、三〇年におたる農業経営および農業経営史に関する内外の理論的、実証的研究を踏まえて、新しい農業経営史学の分野を開拓しようとする、情熱に燃えた労作である。

いうまでもなく「一試論」に到達するまでには、一九二六年に京都大学農学部を卒業して、直ちに農史研究室の一員となつてからの研鑽の過程があるのであり、本書は文字どおり著者のライフワークである。

本書の内容は五章から成るが、前記のような著者の意図によって、主として農業経営史学の位置づけと方法論をあつかっている第一章「序論」に最も力が注がれており、分量的にも全体の約四分の一を占めている。

紙数の制限のために、きわめて大胆な要約

を許していただけるならば、著者はここにおいて、まず一般経営史学に、各時代の一般的経営を対比する方法と、個別経営（企業体）の発展をみる方法があり、前者はドイツに多く、後者はアメリカが主流であるとし、本書においては前者、すなわちドイツ型の方法によることを明らかにしている。

次に農業経営史学の位置づけを前提として農業史学のあり方を各方面から論じた後、本書は農学的農業経営史学の立場に立つと述べる。蓋し農業技術史と農業経済史を総合する学問体系である。

このような方法で精緻に構築された、著者の「日本農業経営史の構造」は、本書の八〇ページと八一ページの二ページにわたって展開された表式によって最も明快に理解することができるとができる。

第二章以下は、前記のドイツ型方法に準じ

て、近世以前、近世前期、近世後期、近代の四時期に分けて、各時期における一般的農業経営の特色を明らかにしている。そのばあい著者のいわゆる農学的農業経営史学の視点がこれまでの農業史研究の蓄積に裏うちされて遺憾なく貫徹されている。

以上、きわめて粗末な紹介に終わり、先学に対して思わぬ失礼をなしていることをおそれるが、本書の序論は単に農業経営史学だけでなく、広く農業史の序論たる意義を有し、第二章以下の時代別各論と相まって日本農業史通論としてもきわめて有益である。

序論はじめ各章に紹介されている膨大な参考文献とともに、広く農学に志す学生、研究者、指導者にとつてこよない指針を与えるであらう。

本書が大きな刺激となつて、著者が端緒的に手を着けたアメリカ型の個別農業経営史の研究がさらに深められ、拡充されていくことを望んでやまない。

（著者は京都大学名誉教授・大阪学院大学商学部教授。五四年二月・ミネルヴァ書房。五五〇〇円）

農業と経営 545巻5号

『毎日新聞』  
1979.4.30

研究室

日本農業  
経営史の研究

三橋 時雄 著

日本農業はここからきて、どこへ行くのだろうか。著者はこの問題を水年、京都大学で研究してきた人である。その方面のいくつかの成果も出版されている。先年、大阪学院大学に移り経営史を担当、これを契機として商工業における経営史学的な手法を、従来の歴史研究に結びつけてみた。それが本書である。従来の歴史は、いわば農業経済の歴史であった。あるいは、その時代、その時代の農業経済を規制する農業技術の歴史であった。それらを半世紀ほど前から確立している商工業の経営史と統合し、新しい学際的な

○田 (ニールウ) 書房・五五〇

『京都新聞』1979.5.6

日本農業経営史の研究

三橋 時雄 著

わが国農業の特徴の一つにあげられるのが小規模経営である。今の農業物産輸入国として居る日本の農業経営の規模の問題は、いろいろ、いろいろと問題意識を一方に置きたらぬが、昭和40年代の農業経営の流れを本書は昭和45年までたどっている。農業経営の歴史をたどる、農業経営の歴史が経営・経営の歴史の歴史が経営・経営の歴史の歴史を指した。

「農業経営史学」を提唱し、本書に、本書のユニークさがある。野心的な著作として、歴史研究の行方ではなく、一般の経営史学界からも注目されよう。日本農業の一つの特徴である経営の小規模性を中心に、果たしてそれが古代から現代を通じて変わらぬ宿命のものかどうかを、実証的に分析している。近世以前、近世前期、近世後期、近代に分けて、それぞれその時期における農業経営の実態とその発展過程を、豊富な資料に基づいて水年の研究成果を基礎にしてまとめた先駆的な努力は評価されてよい。

【報告要旨】 文研例会, 1979.4.21, by 徳永光俊

本書の意義や三橋氏の意図については、上掲の書評・紹介によるのでなす火ているので、省略する。ここでは、三橋氏の40年以上にわたる研究の足跡をたどりながら、本書の内容を簡単に紹介する。

①三橋氏の初期の研究の課題は、「日本農業経営規模の史的考察—家後作的小規模経営は日本農業に宿命的なりや—」であった。そして、「班田時代の農業経営規模」(本書第二章3節)、「名田時代の分割と農業経営規模」(第二章4節)、「検地の農業経営に及ぼした影響」(第三章3節)、「江戸時代における農業経営規模の変遷」(第三章4節)と次の4篇を完成させている。

その結論は「日本の農業経営は歴史的に規模が小さいということはあるが、その時代の社会組織や家族形態や技術の発達の相違に応じて、経営の形態や規模にもかなりの変化があることは違いないが、(本書時頁)であり、「わが国における家後作的小規模経営の原型は、この時代(江戸時代—筆者注)に封建的小農の経営として成立した。」(93頁)であった。

これらの一連の研究は、当時(1945年前後)において極めて高く評価されており、戸谷紋之氏は「西氏(三橋氏)と島氏(筆者注)の著作を転載し、我が国農業経営史は漸く軌道に乗じ、資料の蒐集と並行して、warum, "wozu, "wofür, といふことが研究対象となりつつある。」(『近世農業経営史論』7頁)と述べている。

氏自身は、東洋日本型、(特殊)西南日本型なる歴史類型を提説した。

②戦後の農業史研究は、この戸谷氏の提説、とりわけ特殊西南日本型の検証を中心にするため、創設の意図の真意、農民の分解のあり方等が問題にされた。この期の研究の推進について三橋氏は、「わが国における農業史研究の歴史を見ても一般に農業史学的研究が最も多く、これに比べると農業技術史や農業経済史の研究が著しく乏しい。」(35頁)とまとめている。

この様な研究状況に対し、三橋氏は、「農業経営史の意義(第一章1節)を著述し、農業技術史と農業経済史との関係のあり方、真の農業史的農業史の位置、研究対象、研究方法、目的を整理し、その有用性を明らかにすると共に、「近世農業の経営史調査項目表案」をまとめた。真意の調査研究の便をはかろうとした。このりは、戸谷氏の提説(戸谷前掲書1頁)の具体化を目指し、当時の研究水準を引き上げをはかっていたものであった。

以上の主張に基づき、近世農業経営の検証分析をするため、近世前期については我が国の語彙村北村家(第二章1節)、近世後期は河内守村の村田家(第二章3節)の農業経営を分析した。とりわけ前者については、現在においても高い評価を受けている。(書名は作氏「近世前期の農業生産と農民生活」参照、岩波講座日本歴史(6巻))以上が、三橋氏の1955年前後の研究の概要であり、農業史の進展が確かであるのが特徴である。

③その後の三橋氏は、河内守村農業経営史(荒木幹雄氏と共著、1960年)、豊後村田の農業経営史(1960年)と重層な検証分析を著述すると共に、「日本農業経営史の史的考察(第二章1節)」、「近世前期の農業経営」(第二章1節)、「近世後期の農業経営」(第二章3節)と今迄の研究を収めたまとめで行なっている。

④最近の三橋氏の研究は、「経営史の意義(第一章1節)」に見られる様に、一般の歴史との異なる農業生産の理論化をはかろうとしている。また、「日本農業経営史の意義(第二章3節)」や「あながし」からいえる様に、史的・経済史的側面をも含め、総合的農業史の樹立を目的としていると受け取れる。この点は、②で80年代の研究方向ではやや変わってきているのではなかろうか。



ませるので、ここでは本書成立の経緯とその影響の一端、ならびに私の今後の予定をお知らせし、今後とも変わぬ御支援御協力を願ひします。

まず本書作成の動機について言えば、私が京大退官の時に思っていたのは、『日本農史の研究』という論文集でした。しかし単に古い論文を集めただけでは出版が難しく、その実現を可能にするためには出版助成費を頂くことでした。そうなるに余計に古いものばかりではいけないと、農学部在職中にはその余裕がなくて果たせなかった経営史学の方法論的叙述を序論として書きおろすことにしたのである。そういう訳で、序論は十分に未熟なものですが、幸いこれによって、たとえ結果的には私のいわゆる農史経営史の欠陥を暴露することになったとしても、私のいう農史経営史と普通のいわゆる経営史との関係を明らかにすることが出来て、よかったと思ひます。ことにこの序論については、『農業と経済』における山田龍雄氏の紹介や『毎日新聞』の紹介だけでなく、経営史家としての宮本又次氏からは序論もよかったと言って頂き、作道洋太郎氏からは、「これまで商業経営史に余りにも重点を置き過ぎた憾みのある近世日本経営史に対し警鐘を鳴らした傑作とも存じ……近世経営史の新しい視角を考へ直して行く度い」という手紙を頂き、恐縮してゐます。

そのほかに、本論の方は、戦前の日本の農業経営の適正規模が論議の中心で、日本の農業経営規模の季節性・下史的変遷を目的

として書いた論文などで古いものも多く、農業経営の通史としては、比較的大きな規模の家族が存在した古代から時代が下るにつれて単婚制家族の規模へと家族の規模が縮小し、経営の規模も低下する縮小化の一途を辿ったような書き方をしています。しかし、これに対しては、古い時代にも規模の小さな経営が存在していたという実証的な反論が期待されます。

本論における私自身の事例的な個別経営史的研究としては、やはり徳永工んが紹介して下さったとおり、堺近郊踏尾における商業的地主自作経営が、江戸初期におけるこの種の資料のワイルドなことから最も高く評価されるもので、やはり本書の中では最も高い峰を形成し本書の中心的な重要部分となっています。

最後のオチ章近代における農業経営は荒木氏や貝原氏からのいわゆる借り物で、今後、自分自身のもので補強しなければと思えますが、はっきり言って、その方面の研究は、私よりもお若い菅さんの方が遙かに適任で、荒木工んや菅工ん方の栄ある成果を期待させて頂きたいと思えます。

そして私自身としては、それよりも、先の農史講座担当者としての責任上、この次は農業経営史も含めつつ、それ以外の農史的諸問題についての論文をまとめ、『農史学の研究』または『日本農史の研究』というような本をもう一冊出版したいと思っています。これはなかなか出版が難しいと思いますが、菅さんの御援助によって是非実現させたいと、今後はその方向への努力をして行くつもりです。

今後ともよろしくお願い致します。

(付記：12日は田中さんのお話を伺えないことは歴史研究者としての  
私自身遺憾であり、田中さんはじめ皆様には申し訳ありません。  
何とぞお話し下さいますよう。お詫びの氣をこめつつ、10日夜これ  
を記しました。(三端)

